

第221回企画展

祈りと医療

—昔の人は病とどう向き合ってきたか—

えきびょう

疫病の流行

昔は、現在のような衛生環境、食糧事情、医療などが整っていないなかで疫病に見舞われ、たくさんの方が亡くなりました。予防も容易ではありませんでした。

酒田ではこれまでさまざまな病が流行し、多くの罹患者^{りかんしゃ}と死亡者が出ました。カラカキ病、オシヤラク病と称された江戸時代の奇妙な病に始まり、何度も繰り返し流行したコレラや、まだワクチンが無かった^{ほうそう} 瘧疾^{はしか}、^{まんえん} 狂犬病、日本脳炎などの病気が蔓延し、人々を恐怖に陥れました。

庄内地域周辺の伝染病はまず酒田から始まると言われていました。飽海郡医などを務めた旧松山町の医師・門山周智^{かどやましゅうち}（1849～1910）は『飽海郡衛生誌』（明治29年）で、コレラなどの伝染経路について「恐るべきは酒田港、軽んずべからざるは最上川」と記し、他の地域との交流が多い酒田港と最上川を警戒しています。

酒田で流行した疫病を中心に、昔の人を苦しめた疫病の歴史について振り返ります。

正体不明の奇妙な病

カラカキ病

酒田の疫病の記録は、天和2年（1682）の「カラカキ病」から始まります。「カラ」は「唐」、「カキ」は「掻き」のことだと思われそうですが定かではなく、現在における病名は不明です。

「夢宅年代記」には、「この年ふしぎの病はやり、人多く死にたり、其の故は、正月雪中に身を痛め、又は雪につまづき、手足を痛め、是^{これ}が病の元となり、後には段々腰痛はれて齒も痛み、身紫ぶちて五十日、六十日といへば死す、色々養生はすれどもかなわず、医者も知らざる病にて、其の名も知らず、はたして『カラカキ』と名付たり、然^{しか}れ共男にはつかず、三十四、五、五十二、三の女幾たり死すと、数も知らず」とあります。歯茎から出血したり身体が紫ぶちたりすることから、ビタミンCの欠乏による壊血病^{かいけつびょう}と推測されています。

同年4月、遅れ気味の雪解けに大雨が重なり、最上川が大洪水になっていることから、雪解けの遅れにより生鮮野菜の出回りが途絶えたことが予測されます。しかし壊血病だとすると、女性だけがかったという点で疑問が残ります。

オシャラク病

症状が不明確なため現在における病名は不明ですが、享保7年（1722）の春から流行し、酒田で3,000人余りが死亡した病気です。『十全堂誌』に、「享保七年春以来、『おしゃらく』と称する疫病町村に流行し、酒田に於て斃るるもの三千人に及べり、病理徴候詳かならず」とあります。

「オシャラク」とは「おしゃれ」「おじゃれ」「おじゃれ女」の意味を持ち、遊女に関わりのある病気とも考えられます。インフルエンザという説がありますが、夏にこれほど流行するかは疑問が残ります。夏の疫病であることから消化器系で感染力が強い赤痢のような病気ではないかとする説もあります。

酒田におけるコレラ流行

コレラは、虎列刺（これら）、狐狼痢（ころり）、暴瀉病（ぼうしゃびょう）などさまざまな名前と呼ばれ恐れられました。発病すると2～3日で死んでしまうほど進行が早いため「三日ころり」とも言われました。

経口感染するウイルスで、コレラ菌に汚染された水や食べ物を口にして、胃酸で死滅しなかった場合に感染します。発病すると激しい下痢と嘔吐に見舞われ脱水症状になります。

酒田では安政6年（1859）に初めて大流行して多くの死亡者を出し、これ以降何度も流行しました。明治12年（1879）の流行時は、飽海郡で430人が罹患、うち273人が死亡しました。また、県令三島通庸みしまみちつねによる厳重な取り締まりが実施され、青果物や鮮魚類の売買が禁止されました。

患者は、同年8月に大浜に建てられた避病院（※）に隔離・収容されました。避病院はその後、時期は不明ですが浜畑（現在の栄町）に移転しました。病死体は戸板や荷車で運び、北千日堂前松境の砂山に埋め、これを「コレラ山」と称し、大きな藁人形わらを立てて目印にしました。

※避病院…明治時代の伝染病専門病院。全国各地に設置された。明治10年（1877）に出された「虎列刺病予防法心得」（内務省通達乙第89号）ではコレラ患者は避病院に入院させなければならないことが初めて規定されている。



▲コレラ地蔵

明治13年、コレラによる死亡者の供養のため建立された地蔵尊です。

「コレラ地蔵」と呼ばれ、松境配水場近く（北千日堂前松境）に祀られています。

スペイン風邪の流行

年表には入っていませんが、大正時代に猛威を振るった病気で、世界中で約4,000万人が亡くなりました。

内務省衛生局の報告書『流行性感冒^{かんぼう}』(大正11年/1922)によると、日本では大正7年(1918)から同10年(1921)にかけて3回にわたって流行しました。およそ39万人が亡くなりました。

同書によると、山形県では第1回流行時(大正7年10月上旬~大正8年7月)には人口のほぼ半数にあたる457,905人が罹患しています。3年間の総患者数は486,928人、総死者数は5,781人に上りました。

古典に見る病の流行―「世の中騒がし」―

古典の中にはときどき「世の中騒がし」という言葉が登場しますが、これは多くの場合“疫病の蔓延”を指します。昔は《世の中を騒がせるもの=疫病》と結びつくほど人々を苦しめたものでした。

平安時代の歴史物語『栄花物語』や鎌倉時代の随筆『徒然草』など有名な国文学にもこの言葉がたびたび登場しており、疫病がいつの時代も流行していたことが分かります。医療が発達していない当時の対処法はもっぱら^{きとう}祈祷でした。

酒田における疫病 年表 (参考：酒田市立図書館/光丘文庫デジタルアーカイブ)

年号	西暦	月日	事項文
天和2	1682		カラカキ病 と呼ばれる奇病が流行し、人が多く死亡する。
享保7	1722		春以来 オシャラク病 (インフルエンザという説がある) が流行し、酒田でおよそ3,000人が死亡する。
寛保2	1742		酒田に 狂犬病 が発生し、翌年には山本河内 (現在の酒田市山元) まで広がる。
寛政2	1790		夏から秋にかけて全国的に 疫痢 (小児に見られる重症型の赤痢) が流行する。医師・伊藤維恭がその治療に当たり、効を奏する。
天保4	1833		庄内に 傷寒 (急に熱が出る病気) が流行する。酒田は最も甚だしく、死亡者が多く出て、棺屋では2,000基の棺を売り尽くしたという。
安政6	1859	8月	酒田で コレラ が流行し、庄内各地に広がる。(庄内史年表)
万延元	1860		3月から5月にかけて、 コレラ による死亡者が多くなる。 疱瘡・麻疹 が流行する。
文久2	1862		4月から6月にかけて酒田で 麻疹 が流行し、船場町で184人、酒田全体で646人が罹患する。死亡者が多く、盆踊りに出る者が少なかったという。(余目町史資料一)
慶応元	1865	5月	疱瘡 が流行し、酒田で1,200人が死亡する。
明治11	1878	8月	飛島に コレラ が発生する。
明治12	1879	7月26日	飛島より コレラ が移り、流行する。飽海郡で430人が罹患、うち273人が死亡する。10月30日に至ってようやく収まる。8月大浜に避病院をたてる。病死者を北千松境に葬り、コレラ山と称する。(飽海郡衛生誌)
明治14	1881	7月19日	コレラ が流行する。飽海郡で494人が罹患、うち39人が死亡する。(飽海郡衛生誌)
明治15	1882	8月	新町から コレラ が発生し、庄内一帯に流行する。(庄内史年表)
明治16	1883	7月	コレラ が流行する。
明治19	1886	8月	コレラ が流行し、300人余りが死亡する。(咄しの種瓢)
		9月	腸チフス が流行する。
明治28	1895		コレラ が流行する。治療にあたった医師・伊東清基もコレラに罹患し没する。(享年56)
昭和9	1934	1~3月	県内各地に 流行性感冒 (呼吸器系の感染症) が蔓延する。酒田で1,673人が罹患、うち2人が死亡する。
昭和23	1948	8月	県下に 日本脳炎 が蔓延する。庄内地方で21人が罹患、うち8人が死亡する。

さまざまな祈りのかたち

医療が発達しておらず今ほど頼りにならなかったころ、人々は祈ることで病に対処していました。病を退けてくれる神に頼ったり、病そのものを神として祀って村の外に送り出す儀式を行ったりしたのです。

酒田にもさまざまな祈りの風習がありました。予防接種の普及や、医療の進歩により病に苦しむ人が減ってくると同時に、やがて衰退した風習も多くありますが、現在も続けられているものもあります。例えば毎年行われる身近な祭りや神楽もそのルーツをたどると、疫病退散や、無病息災など、健康で長生きしたいという願いが込められていることもよくあります。

病と健康に関するさまざまな祈りのかたちを紹介します。

道祖神信仰について

道祖神とは「塞の神」（^{みちがみ}さえのかみ、^{ちまたのかみ}さやのかみ）、^{くなどのかみ}「道神」「衢神」「岐神」「塞大神」などと称される神で^{さい}「幸の神」「^{さい}歳^の神」とも表記されます。酒田では「サイド」「サエド」「センド」または「ホンテ」などと言います。

日本の民俗信仰の一つで、全国各地で盛んに信仰された神です。起源は古く、はっきりとしたことは分かりませんが、中国の道祖神（^{どうろくじん}道陸神）信仰も合わさって複雑なものになっています。道祖神はさまざまな^{りやく}利益が説かれています。元来「境を守る神」で、村の入り口（境）に立って**疫病や悪霊の侵入を防ぐ**強力な神格と考えられてきました。

また日本神話で、神々が降臨するときに先頭に立って道案内を務めたとされる^{ざるたひこ}猿田彦は、^{こうしん}庚申信仰で祀られている神ですが「道の神」である道祖神を連想させ、いつからか混ざりあい信仰されるようになりました。

酒田では、道祖神祭は^{こしょうがつ}小正月（旧暦の1月15日前後）の行事として、鳥追いや、塞道の幕見などの行事と結びついて行われます。



塞道の幕見

「塞道の幕見」は酒田特有の小正月行事で、道祖神祭の時に塞道幕という絵幕を各町内の黒い板塀などに展示して見物する行事です。子どもたちを中心に老若男女が町々の塞道幕を見に歩いたといえます。塞道幕には合戦など歴史上の出来事や、武者絵、縁起の良い物などが描かれました。酒田市街地を中心に松山や新堀などでも行われ、現在40点以上の塞道幕が確認されています。

酒田の獅子舞と神楽

獅子舞は悪魔払いや悪疫退散を願って奉納される舞です。平成5年(1993)に山形県が行った調査で、酒田では44件の獅子舞が確認されました。その中で約半数の20件が、明治期に始まっています。

明治期、酒田では明治12、15、19、28年と何度もコレラが流行しました。恐ろしい流行病が猛威を振るう中、人々は獅子舞に加護を求め、疫病除けの願いを込めたものと思われます。

例えば城輪獅子舞の起源は、明治10年頃のコレラ流行を受け、当時の宮司が城輪神社にこもって祈祷し、それから患者の家々をまわったのが始まりだと言われています。

また、獅子舞に限定せず神楽全体を見ると、西野神代神楽や落野目神代神楽などは明治の疫病流行を受け、一時衰退していた神楽を復活させたと言われています。このように、酒田の獅子舞や神楽は、疫病と関係が深いものが多いです。



山王祭で奉納された亀ヶ崎獅子舞

昭和

酒田まつりの獅子パッケン

獅子に頭を噛んでもらうと厄除けになったり、無病息災のご利益があるとされるのは全国的な風習ですが、酒田まつりの大獅子の場合、小さい子どもを獅子の口の中に入れて「パッケン」していますよね。口に入れられて大泣きしている子どもを見たことがある方も多いのではないのでしょうか。これは「獅子パッケン」と呼ばれる、酒田まつりで人気のイベントです。

大獅子は、昭和54年(1979)、酒田大火からの復興を記念して祭りに登場しました。獅子パッケンがいつから行われていたかは定かではありませんが、その名称が使われ始めたのは平成14～15年ごろです。また平成27年(2015)以降、市広報に掲載される祭りの地図の中に「獅子パッケン場所」という場所が記されるようになりました。写真は平成5年(1993)の酒田まつりで撮影されたものです。



庚申信仰について

庚申信仰は、平安時代から日本に伝わり、江戸時代から明治時代にかけて爆発的に流行し信仰されました。

庚申信仰の考えによれば、人の体内には生まれながら「三尸^{さんし}」という3匹の虫が住んでいて、60日に1度くる庚申^{かのえさる}の日、人間が寝ている間に抜け出して天に昇り、天帝に人間の行いの善悪を報告します。三尸は人間の体内を牢獄とと思っているので、早く人間に死んでもらい自由になりたいと、どのような小さな過失でも逐一報告してしまい、天帝はその罪によって人間の寿命を縮めるとされました。人間が起きていれば三尸は抜け出せず、この報告を阻止できるとして、長生きするために庚申の日は寝ずに朝を待つ、ということで始まったのが「庚申待^{こうしんまち}」です。

中国の道教思想をベースに、仏教や神道が合わさっています。仏教では青面金剛^{しょうめんこんごう}、神道では猿田彦を本尊としています。青面金剛は、本来は庚申信仰と無関係でしたが、伝尸^{でんし}（結核などの感染症）という伝染病から守ってくれる仏であったことから、伝尸と三尸を関連づけたという説があります。また猿田彦も庚申（かのえさる）から連想したとされています。



▲青面金剛

年代不明

宮野浦の庚申講で使用したものです。この講は昭和20年代まで続けられ、その後途絶えました。

中山神社（旧松山町）境内

にある庚申塔▶

寛政12年（1800）建立

庚申塔^{こうしんとう}は、60年に一度の庚申^{かのえさる}の年に建てると災いを免れるとされ、この石塔も庚申年に建立されています。そのほか、庚申講を一定期間続けた時、飢饉^{ききん}や天災があった時にも建立されました。



▲宮野浦の庚申塔

左の塔は明治11年（1878）建立。右の塔は建立年不明。

鐘馗像 しょうき

江戸期、筒井雲泉筆 つついせん



鐘馗は、中国の故事に登場する神です。疫病を退け、魔を除く利益があるとされ、版画や印刷物などに盛んに描かれました。肉筆画も多く残っています。

雲泉（生没年不詳）は江戸中々後期に活躍した酒田出身の絵師です。寺町に生まれ、江戸の扇子屋に奉公に出て、狩野流の絵を学びました。酒田へ戻った後は絵業に専念し、浜町に住んだとされます。

子どもの健康を祈って

昔、出産前に産着うぶぎを用意せず、生まれてすぐの子どもはボロきれや着古しの着物などで包むという風習が各地にありました。7歳でやっと神様の世界から人間界に迎えられるという意味の「七つまでは神の子」という言葉も、よく言われていました。まだ抵抗力のない乳幼児はそれだけ育ちにくく、子どもの健やかな成長を願う家族の気持ちは切実でした。

病気を乗り越えられるように——。病気にかからないように——。そんな家族の祈りはさまざまな形になっています。



▲背守り入り幼児用着物

➤ 「背守り」で小さな子どもを病魔から守る

ウイルスが目、鼻、口から侵入するという常識が浸透する前、病魔は無防備な背中から侵入するという考えがありました。大人の着物の背筋には縫い目があり、この「目」があれば背後を見張ることができますが、小さい子どもが着る「一ツ身」という着物の背筋には縫い目がありません。そのため、お守りとして縫い目をつけるようになったのが「背守り」です。縫い方が学校の裁縫の教科書にも掲載され、全国的に普及しました。

疫病送りの風習—疱瘡送り・麻疹送り—

現在の日本では感染の心配がなくなった麻疹と疱瘡（天然痘）。どちらも感染力が強いうえに死亡率も高く、昔は周期的に流行し、とても恐れられていました。

この病をもたらすのは疱瘡様、麻疹様という疫病神やくびょうがみと信じられ、子供が病にかかった家で行ったのが、疱瘡送り・麻疹送りという風習でした。棧俵さんだわら（米俵のふた）に赤い御幣ごへい（ぼんてん）を立て、小豆飯をのせたものを、村の境や神社などに供えるというものです。麻疹送りでは白い御幣を立てる場合もありました。小豆飯は村の子どもたちに振る舞われました。

村の境に供えたのは、村の外に悪神である疫病神を送り出すためです。道祖神信仰にも共通していますが、村という共同体を悪いものから守る意味で、村を分ける境界をとっても大切な場所と考えていたことを示しています。



▲妙法寺に供えられた麻疹送りの御幣



「疱瘡送り」五十嵐豊作 画

五十嵐豊作(1917～2001)は鶺鴒渡川原村(現在の亀ヶ崎地区)に生まれ、思い出を頼りに描いた鶺鴒渡川原の風景を数多く残しました。

手前に赤い御幣を手にした女性が描かれ、道沿いにも同じような御幣が並んでいます。

疱瘡送りまたは麻疹送りの御幣▶



遊摺部の天王様送り



天王様とは、神仏習合の神である「牛頭天王^{ごずてんのう}」のことです。もともとは疫病を流行らせる力を持つ悪神だったともいわれますが、いつからか病気や災いを除く神として信仰されるようになりました。

天王様送りは遊摺部で行われている行事です。もともと6月15日に行っていましたが、戦後以降は7月中旬に行っています。当日は公民館に「牛頭天王」の掛軸を掛け、キュウリ、ぼたもちを供えます。遊摺部神楽保存会の会員たちが朝から

藁を編んで、長さ150cmほどの船を作ります。また藁人形を2体作り、これを天王さまと船頭として船に乗せます。暗くなったころ、船をリヤカーに載せて皇大神社から出発し、子どもと会員たちは笹竹の先に口ウソクを取り付けたものを持って一緒に行列を作ります。行列が村内を一巡すると、家々の人は出迎えて天王様を拝み、キュウリ、ぼたもち、パン、賽銭^{さいせん}などを船に納めます。最後は最上川岸まで送り、船内の供物を子どもたちに分配して、船を川に流します。

写真は平成に撮影された天王様送りの様子です。

亀ヶ崎城下の牛頭天王宮^{ごずてんのうぐう}（亀ヶ崎一丁目）



由緒書によると、江戸時代初頭の慶長年間に亀ヶ崎城下で信仰されていた天王宮（牛頭天王のことか）の像を作って村中を練り歩き、その後、享保13年（1728）に羽黒山より牛頭天王の分霊^{かんじょう}を勧請してお堂を建立したといえます。

明治11年（1878）以降は旧戸沢町・横道町で祭事を維持継承し、現在は戸沢町自治会が鎮守^{ちんじゅ}の神様として守っています。7月14日の例大祭（現在はその前後の日曜日）では、八雲神社と同じくキュウリを供えるのが習わしに

なっています。

平成6年に移転新築された現在の社殿には、牛頭天王と同じ疫病神である疱瘡・麻疹神も祀られています。

無病息災・病氣平癒を祈願した絵馬

願い事に絵を添えて、神社やお寺に奉納する絵馬。紹介しているのは、酒田の寺社のものではなく、新しい絵馬ですが、無病息災、病氣平癒を祈願するために昔からあった絵馬です。願い事が「逆さまつ毛が治りますように」であれば、さかさまの松を描くなど、ダジャレのような発想でさまざまな絵馬が作られていることが分かります。

<p>吞龍大師</p>	<p>田螺</p>	<p>釘と釘抜き</p>
<p>祈願：小児病平癒、子の健やかな成長。</p>	<p>祈願：眼病平癒。螺（つぶ）とつぶら（眼）をかけている。</p>	<p>祈願：病氣平癒。</p>
<p>錨くわえ女</p>	<p>鎌</p>	<p>目</p>
<p>祈願：歯痛平癒。強い歯になり、浮いた歯がおさまるように。</p>	<p>祈願：子どもの瘡（くさ）平癒。鎌で草を刈り取ることから。</p>	<p>祈願：眼病平癒。</p>
<p>腹がけ</p>	<p>えい</p>	<p>両手</p>
<p>祈願：腹の病氣平癒。</p>	<p>祈願：痔平癒。</p>	<p>祈願：腕の病氣、リウマチ平癒。</p>

「疫病除禦」と書かれた八雲神社の御札

明治～大正

八雲神社（酒田市御成町）は、永禄8年（1565）に京都祇園社牛頭天王（現八坂神社）の分霊を勧請したのが始まりと伝えられています。昔から、疫病神である牛頭天王にウリ科の実を供えて無病息災を祈願したと伝えられ、7月14日の例祭には参拝者がキュウリを供えることから、現在も「キュウリ天王様」の通称で親しまれています。

この剣形をしたお札は「^{けんぼらえ}剣祓」といい、悪いものをやっつけるという強い意味を持ちます。中に依り代の玉串が入っています。

八雲神社宮司・本多憲道さんの話では現在は発行しておらず、昔もいつも発行していた御札ではないそうです。御札に名前のある本多重義さんは明治後半から大正時代の宮司であることから、コレラやスペイン風邪などが流行した時に特別に発行した御札と考えられます。



江戸～明治時代における酒田の医療

酒田では江戸時代から数多くの医師や関係者が医療体制の整備に尽力してきました。

元禄8年(1695)の「酒田惣御町医師之覚」には、酒田には40人の医師がいたことが記録されています。このうち「本道医」が31人と多くなっています。本道とは今でいう漢方のことで、当時の内科です。

享保5年(1720)、酒田町奉行・坂尾甚兵衛は、酒田の町医に対し「月番」を定めるよう命じ、25人が月交代で急病人の治療にあたりました。

天保2年(1831)、豪商・白崎五右衛門一実が酒田町医修行引立掛に任命されます。医学研究のための施設が必要だと考えた白崎は、町医・佐藤高庵かすさねと協力して、天保4年(1833)に医会所「十全堂」を創設。本町六丁目(現在の中町三丁目)の高庵宅を利用し、医術の研究と貧民の治療を行いました。十全堂はその後長く酒田の医療充実の中心的役割を果たしました。

江戸時代には、医師免許は無く、身分にかかわらず知識さえあればなることができる職業でしたが、十全堂では、明治元年(1868)以降、他所から来て酒田で開業する医師に対し、試験を課しました。日本で医師として開業するのに許可が必要になったのは、政府が「医術開業試験」の実施を始めた明治7年(1874)からでしたので、全国に先駆けて制度を整備していたと言えます。

明治期になると伊東清基や門山周智など西洋医学を学んだ医師が大流行したコレラなどの治療や予防にあたり、地域医療の近代化に努めました。

十全堂が酒田で最初に行った種痘

安政5年(1858)、天然痘のワクチンである種痘を十全堂で初めて実施しました。

種痘の必要性を説いたのは酒田の素封家・竹内伊右衛門でした。十全堂は、弘化2年(1845)の火災で焼けて無くなっていましたが、伊右衛門は十全堂創設者・一実の息子で酒田町医修行引立掛の白崎五右衛門一誠に相談し、荒町に十全堂を再建しました。土地は一誠が亡き父の遺志を継いで無償提供し、費用は伊右衛門と町医師たちが出しました。

再建した十全堂で種痘を開始しましたが、西洋医学が浸透していない当時、予防接種に対して抵抗を示す人も多くいました。伊右衛門は、家々に出向いて説得し、ご馳走ちそうしたり、金銭を渡してまで種痘を受けさせたといいます。そうしているうちに、だんだんと効果が現れ、我が子の死を免れることができたのは伊右衛門らのおかげだと感謝する人も出てくるようになりました。開始から3年間で254人の子どもに種痘を行いました。

種痘はのちに定期接種の対象になりましたが、昭和55年(1980)に、天然痘が世界から根絶されるとともに廃止されました。



平成元年(1989)ころの十全堂

明治10年(1877)には、医業者の研修と連携を目的に飽海郡開業医公会が結成され、十全堂はその集会所になり、集会はたいへん盛り上がりました。

その後も「十全堂社」として昭和まで、地域医療・公衆衛生・看護師養成など幅広い活動を続け、現在の(社)酒田地区医師会十全堂へとつながっています。

身を挺してコレラの治療に当たった 伊東清基 (1840~1895)



仙台藩士・諏訪主水の子として生まれ、16歳で江戸に上り医術を学んだ伊東清基は、明治元年(1868)に酒田で開業し、十全堂社長、酒田医会会長、大日本衛生会飽海支会長などの要職を務めました。酒田ではまだ浸透していなかった西洋医学の医師として、その普及にも努めています。

明治16年(1883)、荒町にあった十全堂社が手狭となり移築されましたが、これも清基の力によるところが大きいとされています。

明治28年(1895)、酒田でコレラが流行すると身を挺して治療にあたり、自らも感染して56歳で没しました。人望が厚く、葬儀の参列者は本間家当主を上回ったと伝えられています。

地域医療の振興に尽力 門山周智 (1849~1910)

門山周智は松山藩士の6男として生まれ、長兄・周政の養子となり跡を継ぎました。明治7年(1874)に上京し、緒方これよし惟準(尾形こうあん洪庵の次男)に師事し内科・眼科を学び、同9年に松嶺(旧松山町)に開業しました。

大流行したコレラの予防のため、明治15年(1882)に連合私立衛生会が開設されると、議長に就任し、同年に飽海郡医になりました。同19年(1886)には開業医を対象とした医業講習所「じゅんかどう淳華堂」を開設。町会議員も務めています。

明治24年(1891)、住居の便所や、農家のこえづか肥塚についてなど、飽海郡の劣悪な衛生状況について多岐にわたって調査し『飽海郡衛生誌』を出版。飽海郡の医師たちとともに衛生環境の改善を呼びかけています。

明治27年(1894)の庄内地震の際は、自宅が半壊した中で医療器具・薬品を運び出し、徹夜で被災者の治療にあたりました。地震後しばらくの間、ひっきりなしに被災者が訪れ、その数は100人を超えたと言います。

女優・黒柳徹子は周智のひ孫にあたります。

第一期種痘済証 昭和6～22年

第一期の種痘を受けたことを証明するものです。

明治42年(1909)、「種痘法」が公布され「種痘法施行規則」が制定されました。この規則により、種痘は国民全体に強制的に行われることになりました。定期種痘を二期に分け、第一期は出生より翌年6月まで、第二期は数え年10歳と定められました。昭和23年(1948)に予防接種法ができるまで、種痘は法律に定められた唯一の予防接種でした。



戦後の酒田の伝染病医療について

昭和21年(1946)、酒田市では320人もの伝染病患者が出ていました。翌22年(1947)、米軍山形軍政部衛生課長・パイク中尉による視察が行われ、「酒田市に性病及び決定伝染病患者を収容する特殊病院を直ちにつくれ」という要求が出されました。

これに応じて、酒田初の総合病院として創設されたのが公立酒田病院です。設立時の診療科目は、内科、外科、婦人科で、伝染病に30床、結核に50床の病床が確保されました。戦後の混乱期に、それまで入院設備の無かった市民にとっての大きな救いとなりました。

昭和35年(1960)に社会保険酒田病院と統合して市立酒田病院になり、平成20年(2008)には県立日本海病院と再編・統合して、日本海総合病院になっています。



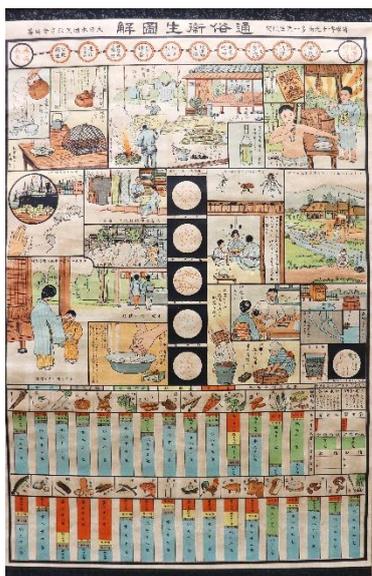
公立酒田病院
昭和30年代

公衆衛生と家庭薬

明治になり、日本の医療の中心が東洋医学（漢方）から西洋医学へ移り変わったことで登場したのが、疾病を予防し、健康な生活を送るために、地域全体でさまざまな衛生活動を行う「公衆衛生」でした。

ネズミやハエやカなど感染症の原因となる生き物を駆除し、清潔な生活環境を整えるという考え方は、基本的に現在も変わっていません。

家庭の常備薬として親しまれ、けがや急な発熱などで活躍した懐かしい「おきぐすり」も紹介します。



「通俗衛生図解」

医学博士・北島多一校閲、大日本国民教育会編

大正7年（1918）

衛生に関する考え方が一目で分かるように作成された掛図です。上部には、「健康へ行く道」として、早起き、清潔、食物、伝染病の予防、迷信を去ること、公衆衛生などが「無病長寿」へ至る方法だと記されています。

生活様式の変化はあっても、ここに示される感染症対策は現在に通じるものがあります。



傳兵衛薬局の写真と引札

創業者・佐藤傳兵衛が幕末から薬の行商を始め、明治4年（1871）、中町一丁目に店を構えました。写真は明治30年（1897）ころに撮影されたものです。



いろいろなおきぐすり

昔から家庭薬として一般的に使われてきたのはおきぐすりです。

最も有名な「越中富山の薬売り」は、江戸中期から全国に普及し親しまれてきました。お土産の紙風船などは懐かしく覚えている人もいるのではないのでしょうか。

薬屋のおみやげ

子どもたちは、薬屋が持ってくる版画絵や紙風船などのお土産を楽しみにしていました。

版画絵は「富山絵」「売薬版画」などと呼ばれ、歌舞伎役者や名所、縁起の良い物などが描かれました。



寄生虫の駆虫薬「セメン圓」に見る架空の病の虫たち



パッケージに「虫下し」とありますが、昔の人がいう「虫」の病気は2つあり、一つは「寄生虫」で、回虫、条虫、^{ぎょうちゅう}蟯虫のことで、そしてもう一つは体内にいると考えられていた架空の「虫」による病気です。例えば赤ちゃんの体内には「^{かん}疳の虫」がいて、夜泣きやひきつけなどを引き起こすと信じられていました。医療が発展する前は病気の原因や症状を明確に説明できなかったため、分かりにくい病気を虫のせいにしたのではないかと考えられています。

セメン圓は大正時代の寄生虫の駆虫薬です。この時代まで疳の虫が信じられていたとは考えにくいのですが、パッケージには空想上の虫たちが描かれ、その名残が残っています。